

美術院の設立を望む

黒田清輝氏談

美術院の設立を望むか、とお尋になるのですか。實は私も左様いふやうな機關が一日も早く、政府に依つて建設されん事を望んで居るのだが、何も今度文藝院が設立されるといふから、其に倣つて美術院も是非同時に設立せよなんていふ譯ぢや無いのだ、單に文藝院が設立されるといふ事だけでも、私は非常に結構な事だと思つて居る、勿論左様一時に種々な機關の設備を望んだ所で、政府の財政が許さなないのは知れきつて居るから、先^まあ一つづゝ順々に成り立たせて行くより他に仕方が無い。兎に角、斯様いふ様な問題が提供されるに至つたのは、時世の運氣に推されて、當局者も國民も等しく、此の種の機關の必要を適切に自覺して來た證據で、眞に喜ぶべき現象だと思つて居る。私も、將來美術の發展を期圖する上から日本にも、佛蘭西のアカデミーの様なものが必要だと思つて、十年も前か同志の者と相談して、頻りに對つて其の設立を説いたり、或は雜談の中に意見を洩らしたりした事もあるが、未だ今日まで聽許されない。漸く一昨年から文部省に依つて、公設展覽會が開かれるやうになつたものゝ、單に展覽會を開くといふ事だけでは、決して充分とは云へません、つまり展覽會などは美術院の事業の一つとしていゝのでありますから、是非とも行くゝは展覽會などを一と纏めにした美術の保護獎勵の機關が設立されん事を希望します。

一 擘、佛蘭西のアカデミーといふものは、アンスチチュウと云ふ學士會院のやうなものゝ、内の分科の名稱で、五

つのアカデミーを集めて、アンストチユーと云つて居る。だから、アンストチユーの範囲は非常に廣い。文藝のアカデミーもあれば、科學や美術に關すアカデミーもある。又一つのアカデミー^マが幾つかの部分に分れて居る。科學のアカデミーは十一部に、美術は五部に、政治哲學の方も五部に分れて居る。文學の方は純文學と古典と別々のアカデミーになつて居て、其の中には部類分けはない、美術の五部は、一、繪畫、二、塑像、三、建築、四、彫板、五、作曲である。アカデミーの會員は皆撰擧されて成るのだが、アカデミー會員に選ばれるといふ事は、彼方でも非常な名譽と考へられて居るのです、何！會員は佛蘭西人からばかり成つて居るかと思ふのですか、通常會員としては、佛蘭西人ばかりですが、准會員又は通信員として、外國の大家も推薦される規定になつて居る、其の數には定員がある、通常會員にも勿論定員があつて、美術に屬する會員は幹事一名、通常會員四十名、特別會員十名、准會員十名、通信員五十名といふ極めである。科學の部門に屬する會員の數が五つのアカデミー中で一番多い、幹事二名、通常會員六十六名、特別會員十名、准會員八名、通信員百名である。

サテ美術のアカデミーは種々の懸賞法を設けて、頻りに美術の獎勵保護に勉めて居る、彼の美術學校の最高等の競技の時に、生徒に與へる製作の課題なども、アカデミーから出す事になつて居て、其の競技の優勝者には、留學費を給して、伊太利、羅馬に遊ばせる、又別に賞金も與へる。斯ういふやうになつて居るから、學生は此の名譽を荷はうと思つて、毎年非常な競争が行なはれるのである、是は、ほんの一つの例に過ぎない。

元來日本は美術國として頻りに誇つて居る癖に、何故、此のアカデミーといふ様な機關の設備が怠たられて居るのだらうかと思つと、頗ぶる怪訝の念に堪えないのである。若し、日本の美術の將來を考へて見たならば決して

安心しては居られない、何んなに小規模でも宜いから、一日も早く、アカデミーの如きものを設けて、國の美術の保護獎勵に勉めて貰ひ度いものである。

美術院の組織や制度に干しては、何も之を、全然佛蘭西のアカデミーに倣らふには及ばない、日本では、日本の現代に適當したのを拵へるが宜からう、斯んな事は世の識者と當局者とが相談して規定すれば、譯の無い話である。

美術院を組織するに當つて人が最も困難な問題だと思ふのは、人選といふ事だらう。他の文學や科學の側では既に社會の尊敬を受けて居る學識ある澤山の人の中から選ぶのだから、人選は比較的容易だが、美術院は、美術家を基として組織しなければならぬのであるから甚だ人選が難かしい。御承知の通り美術家といふ者は、技藝で暮らしを立て、居る一種の職人のやうな者だから、技術に懸けては甚だ堪能な者でも、人格の上からは甚だ欠く所の多い者である。然し人物が無い、人選が難かしいと云つて躊躇して居た日には、何時まで經つても、到底美術院を設立する事は出来ないから、人選も宜い加減にして設立を急がなければならぬ。よし又幾分か人格に欠點のある者が選ばれた所で、其の位置に身を置く様になれば、自然其の人の品性も高まつて來ませうし、全じ人が何時までも活て居る譯でもなし、其れに將來は新教育を受けた立派な美術家も出來ませうから、完全といふ事は數十年の後に見るとして置てよからうと思ひます。

展覽會も、固より美術獎勵の一端ではあります、美術院の事業としては、此の他に、古い建築物の保存だとか、國寶の保護だとかいふ様な事も是非行つて貰はなければならぬ。亦、常設美術館、展覽會なども、美術院の手で建設して貰ひたい、展覽會を開くのものにも、雨洩りのする様な會場を、借る貸さぬと云つて、争ふ様な不躰裁な

事の無い様に爲たいものです。

作品の取締りに就いても、美術院が設置された暁には、一切此所で厳正公平に審査して、風俗を亂す様な虞ある作品は、勿論之を排斥するといふ風になつたならば、美術と縁の遠い内務省の役人や、警視廳の官吏等と衝突する事もなく、萬事が都合宜く解決されるであらう。

私は美術院の仕事が、どの位有益であるかといふ事を信じて疑がはぬのであるから、日本美術の發達を期圖するに就いて一日も早く此の機關が設置されん事を切望して止まぬのである。

○大に畫學校を興すべし。

今度、京都に畫學校が新設された相であるが、私は夙から斯^か種類^かの學校の設立を望んで居た。京都は彼れ程、美術、工藝の盛んな土地で有りながら、今迄専門の畫學校が一つも無かつたと云ふのは實に大なる缺點であつた。世間では美術といふものを、只高尚な、贅澤な云はゞ無用のものゝ様に考へて居るので、兎角、美術は次にされる様だ。成る程一面から見ると、美術は如何にも贅澤な不必要なものに見えるが、然も他の一面から見れば、總ての美術品は直接間接に人間の生活上の必需品を成して居るのである、此の點に關しては、美術に對する世間の考へが、少しく誤つて居りはせんか、所詮、美術が日常生活に必要なものであるとすれば、美術の發達に就て畫策せねばならぬ、其れには、高等な美術教育にのみ勉めたところで、なか／＼容易に一國の美術を進める譯には行かぬから、只高尚などゝ云ふような事ばかり云はずに何んでも一般人民に美術思想を普及させるやうにするのが第一である。美術史を繙いて見ても、一國の美術が最も隆盛に赴いた時は、美術思想が國民一般に最も良く普及し

た時である事が解るのである。

佛蘭西巴里では、下級人民に美術思想を發達させる爲に、程度の低い畫學校が市中到る所に建設せられてある。此の畫學校は大抵夜學校で、晝間の中勞働して居る、職工や徒弟等が、畫學を勉強しに来る所である。此の學校で學んで後に、専門の美術家に成る者も無いではないが、専門の教育は又別の事で、此所には重にペンキ屋の小僧とか、額縁屋の職工などが自分の職業上の必要から勉強に来るのである、其れを市が大いに獎勵して居る。

元來日本人は西洋人に比較すると、一般に美術思想は餘程發達して居る様です。是は全く徳川時代の文化の影で、何んな下級社會の者でも、日本人は殆んど先天的に美的趣味を持つて居るには違いないが是れを此儘にして置けば、程なく西洋人以下に落ちて了ふ事は極まつて居る。だから今の内に政府で少しく茲に意を用ゐて一般國民の美趣涵養に勉めたならば、必つと著るしい効果が見ゆるであらうと信ずる。高等の美術に干しては、元より美術學校の設けもあつて、其所で専門的に益す高遠まよな研究が行はれて行くから一向差支はないが、私は今日の所、寧ろ美術思想を養成する小學校的設備を望むのである。所謂普通教育の圖書も今少しく注意して、兒童の美的觀念を發達させるに足る様なものにして貫らひ度いものと思ふ。

抑々繪畫は、あらゆる美術工藝の根本を爲すものであつて、彫刻でも建築でも、繪畫によつて、皆其の根本の常識を養成し得るものであるから、國民に美術思想を發達させるには、畫學校を盛んに興すのが一番宜いと思ふ、之は市の事業としてゞも、是非實行して貰ひ度い。

巴里市の夜學校設置の精神は、全く美術工藝の保護獎勵に外ならぬので、即ち繪畫は其等の基礎であると云ふ

所から、斯こ様な骨を折つて奨勵して居るのです、今度京都に畫學専門の學校が出来たならば、京都の美術工藝に及ぼす所の利益は、キツト少なくないだらうと思はれる。然し京都の如き美術工藝の中心に取つては、此の一つの専門學校位では少しく物足らぬ心地がする、出来ることなら、此の上に西陣其の他に徒弟の養成を目的とした二二三の學校が欲しいものである。

序でに申しますが、美趣の養成といふ事は殊に婦人に取つては最も肝要である。婦人は必竟獨立して、生活を送るべきものではなく、男子を助けて、家庭を處理して行くべきものである。故に家庭を美化させ、又兒童を教育する上から、婦人に美術思想を注入して置くといふ事は、必要だらうと思ふ。女子美術といふ様な學校もあるが、大抵は女子が獨立して生活し得る様な藝術を授けるのを事業として居て、職業學校と何等の撰ぶ所が無い様である。無論、斯の種の學校の必要なとは云ふ迄もない事だが、私は、他に専ら美術思想の養成を目的とする婦人の畫學校の興されん事を希望して居る。科學的精神の勃興と共に人は漸く美的思想を失なつて、其の生活は愈よ荒敗に赴むかひて行く今日の社會に對むかつて、私は特に女子の美感修養を促むかがすのである。

『新小説』二四 明治四二年四月